

## 広島・小1 女児殺害:高裁判決 事件から3年余 尽きぬ不安、今も / 広島

### 定点警戒“見守り”継続 通学路に地域住民ら

広島市立矢野西小学校1年、木下あいりちゃん(当時7歳)が殺害された事件で、広島高裁は9日、審理を地裁に差し戻し、改めて審理を尽くすことになった。幼い命が奪われた悲劇から3年余り。この日も地元では、冷たい雨の中、子どもたちの安全を願って通学路に立つボランティアの姿があった。

「おはよ」「おはようございます」

9日朝、矢野西小(安芸区)の通学路では、いつもの登校風景が見られた。児童は、踏切や交差点、死角になる場所などに立つ保護者や地域ボランティアらに見守られて、学校に向かった。

中学3年と同小6年の娘がいる主婦、下本知余さん(39)は「子どもたちはだいぶ落ち着いてきた」と話す。事件当時、「本当に不安だった」と振り返る。見守り活動に参加するようになったのもそのためだ。

事件以降、同小を中心に市内で見守り活動が広がった。全市立小140校で、保護者や地域の人による付き添い登校や通学路の定点警戒などがほぼ毎日行われている。

同小でも保護者や住民約100人が毎日、照明が暗かったり、人通りが少ない場所などに立つ。知余さんの夫で同小PTA会長の伸さん(44)は「毎日顔を合わすことで、放課後も『もう5時すぎや。明るいこっちを通り』と気にかけるようになった」と話す。

佐伯区の小学校や幼稚園などに今夏、「こどもたちを殺します」などと書かれた脅迫文が送りつけられる事件があった。その際、付き添い登校や区役所のパトロール回数を増やした。

植永勝成・市教委学校安全対策担当課長は「子どもはどこかで必ず1人になる時間帯がある」と言う。子どもに危険な場所を自覚してもらうため、各小学校は毎学年、児童らに暗がりなどを示す「地域安全マップ」を作らせている。

ただ、千葉県東金市で女児が殺されるなど、子どもを狙った事件は起きている。NPO法人「子どもの危険回避研究所」(東京都港区)の横矢真理所長は「見守り活動は全国に広がった。ただ、いくら見守りをしても穴は生じる。地域や保護者らが自然体で力を貸し合う工夫と、継続することが重要」と指摘した。【井上梢、寺岡俊】

### 安全安心の学校目指す - - 矢野西小校長

矢野西小の土田真理子校長は9日、「二度と悲しいことが起きないように願うばかり。子どもたちの健やかな成長を願い、安全で安心して学べる学校を目指す。毎月命日の22日にある子ども安全の日での『親子登下校』や毎朝夕の集団登下校、見守り活動を継続したい」などとコメントした。岡本茂信・同市教育長も「学校・家庭・地域の連携を強化し、多くの市民の協力を得ながら、事件の再発防止に全力で取り組む」などとする談話を発表した。【井上梢】

## 差し戻しに「残念」 終身刑創設の議論求める - - 父親が会見

判決の言い渡しから30分後、殺害された木下あいりちゃんの父建一さん(41)が裁判所近くのホテルで記者会見した。

法廷には愛娘の写真を持って入廷し、会見場の机にも愛くるしい笑顔の写真を立てた。地裁に差し戻しという意外な判決。建一さんは「正直びっくりしている」と切り出した。死刑でも、そうでなくても、どちらかの判決が出てくれることを望んでいた。「非常に残念」と声を落とした。

「性犯罪は悪質。無力で弱い子どもを狙った犯罪は、厳罰化されるべきだ」。日本の最高刑である死刑を適用することを改めて求めながら、「被告の命を左右する裁判を傍聴し、死刑を求め続ける苦しみを分かってもらいたい」と複雑な思いも口にした。「終身刑があれば、この苦しみは少しは違ったのではないか」と語り、終身刑創設の議論を求めた。

一方、弁護側は判決後にトレス・ヤギ被告(36)と接見。会見した井上明彦弁護士は「被告は混乱した様子だった」と語り、判決については「1審の裁判所と検察官の勝手際を指摘しながら、検察も主張していないことを職権で判断し、我々には反論の余地もない。検察官が2人いるようなものだ」と怒りをあらわにした。【大沢瑞季、矢追健介】

## 傍聴券を求め721人が並ぶ

この日、広島高裁には一般傍聴席(33席)の傍聴券を求めて、721人が並んだ。東広島市西条町の会社員、荒谷広道さん(52)は、会社を休んで傍聴券を求めに来た。「来年5月から裁判員制度が始まるし、死刑か無期懲役か、重大な判決がどういう基準で判断されるのか知りたかった」と話した。【黒岩揺光】

毎日新聞 2008年12月10日 地方版